

藏前から駒場へ

大13. 窯 山内 俊吉

私は大正十一、十二年に互り学友会幹事を重任し色々の面について学友会を通じた当時の思い出をもつている。たゞ関東大震災に会つて全てを焼失したので当時の確実な記録が手許になのが残念である。そこで茲に忘れかけた記憶をたどりながら震災前夜の思い出の一端を述べ創立七十周年の祝意を表したいと思う。

藏前名物の一つは何といつても創立記念日の記念祭であつた。当時は江戸年中行事の一つに数えられていた位であつた。特に大正十二年の記念祭は大正八年以来の大学昇格運動が結実し予算が議会を通過した直後であり、五月十八日に先づ昇格祝賀会を開き賓客、職員学生殆んど全員校庭に祝杯をあげてその前途を祝福し五月二十六日から記念祭も亦一段と盛大の度を加えた。私共は相当に苦勞しこれが終つてから全く気抜け状態であつた事を今尚お記憶している。引きつゞき之又藏前が運動として最も力を入れていた秋の都下大学専門学校のポートルースの下準備に心を碎きながら夏休みとなつた。

しかし夏休みがやうやく終つた九月一日、毅然とたつた赤煉瓦造本館を前にして墨田川畔約一万余坪の敷地にぎつしり建てこめた母校の建物も設備も関東大震災に見舞われ一挙にして灰燼と化して仕舞つた。

私はその頃機械の白倉教授に引きつれられ猪越、吉井の両君と共に对支文化事業の第一回の文部省交換学生として満州支那の視察旅行中であつた、丁度万里長城、八達嶺から帰舎したところ大地震のため、東京、横浜全域、津波は今品川を洗い流しつあるとの号外を手にして唾然としその災害の少ないことを祈念した。地震の起つた業に感嘆の目をみはつていた時刻であつた。楽しい旅が一瞬にして憂鬱な旅に變つた。兎に角予定の道順を経て急いで帰国の途にいつた。

清水港から船で横浜についた。全くの焼野力原に驚いた。更に母校の惨状も全く想像以上であつた。

丁度私は学友会の関係上当時の学校の進み方について色々の手伝いをさせられ又如何にして早く学生を集め授業をつけるかに苦しんだ。当時の教授会もこの善後策に熱心な検討をされていた。学生を地方の高工に分散委託して学生の修学への支障を軽減しようという案が可なり優勢になりかけたとき、学校は建物ではない無形の有機的つながりをもつ団体である、建物はなくとも学校は巖然として存在している、学生の地方分散委託は廃校の前提となる危険性があるとの提唱に学友会も同調し、兎に角地方分散は問題外におかれ鋭意再建への努力につとめた。そして遂に東大農学部(駒場、一高のあつたところ)の教室を借り十一月から気持だけは力強く授業への段階に入った。間借り生活の不便やつらさはあつたが兎に角学園が一つにまとまつて授業が開始された時には涙ながらのえも云えぬ深い感激であつた。

それまでに下宿を焼かれた学生の住居に対して生徒監方をはじめ学校当局は勿論であるが学友会としても色々画策した。渋谷の松濤、神山その他に新しい家が立つのを見ては学校の寄宿舎に或は又下宿にと交渉をして歩いた。しかし焼き出されの多い当時その成功する率は非常に

少なくほとく困った。生徒監佐伯好郎先生の友人矢島哲二氏が佐伯先生と共に献身的な努力によつて巢鴨の方に五十人程度入れ得る家が借りられ修理の上寄宿舎になつた今日尚おその時の嬉しかつたことを覚えてゐる。

私は当時農大正門横の八起館といふ下宿屋にいた。学友会本部をおく室がどうしても学内に見当らずいつの間にか私の部屋が藏前自治の騰寫刷場になつたり（印刷ができないので騰寫刷にして数回発行した、現工大新聞の旧名）又学友会の会議の場所になつたりしていたことを思い出す。

学校は借家住まいで教室を転々と移り歩いて講義をきくなど色々の不便はあつたが気持よく熱心に講義がつけられた。しかし卒業研究だけは焼け残りの他の学校、試験所、会社等に分散する以外に良策がなかつた。

混乱の中に学校の新校舎の建設案が進められ敷地が物色されだした。第一候補地ときまつた現大岡山を校長、生徒監その他の先生方と下検分の御伴をした時は何と淋しいところだろうと思つた。今の大岡山並にその沿線の発展を見、転々今昔の感に堪えない。

私共はこうして藏前七十年を通じ家なくして卒業した特異のクラスではなからうか。

藏前時代は現在の様な広大な運動場もなく二つ程のテニスコートと二百坪位の体操場があつただけである。後は柔剣道場、弓道場などがあつた。従つて陸上競技も出来ず野球など思ひも寄らぬ有様であつた。野球は丁度十一年から十二年にかけて俱樂部組織で他の球場を借りて出かけてゆく様になり茲にはじめて半俱樂部組織の野球部が誕生し学友会は文藝、弁論、音楽、剣道、ボート、庭球の八部を加え九部をもつことになつた。

たゞ墨田川畔であり、恵まれた条件下にあつたためでもあろうボートは中々盛んであつた。

又秋の大学専門学校のボートレースは慥かに当時の大きな呼びものゝ一つでもあつた。卒業生の応援も盛んであつた（藏前漕艇協会）が学内の応援も大体之に集中しレースの季節になると晝休みの生徒控所は応援演説と応援歌の連続で自ら全学をボート気分^{ボート気分}に追い込むに充分であつた。この応援への熱狂振り^{熱狂振り}は当時の若人達に何かしらよい効果をもたらしたことゝ信ずる。

秋のボートレースと春の記念祭とは共に私の血を湧かした二つの大きな藏前への思い出である。

其の他弁論部は校内又は都下学生弁論大会はもとより夏休みには各地区に通俗講演に出かけ科学技術の普及につとめ文藝部は浅草文庫を発行し更に音楽、武道、テニス、弓道等夫々の立場でその道の発展につとめこの外の修養や趣味の会の同好の士によつてつくられ。技術者となる前に先ず人となるための努力を心を砕いている人が多かつた様に思う。

七十年の昔、職工学校として誕生した本学の通つてきた道は決して坦々たる大道ばかりではなかつたが割に恵まれた環境下に育成され、我国産業の発展に大きな足跡を残した。今や七十年を閲し、更に進歩した教育方法の採用につとめ、すぐれた人材の養成に全力を挙げている本学が今後更に年を重ねると共に益々繁栄の道を迎える様、祈念してやまない次第である。

（工博・本学教授）

（東京工業大学七十周年記念誌 昭和二十六年五月十八日）